耳鳴を主訴とした外耳道ダニ寄生症例

— ペットブームへの警鐘 —

末武 光子・湯浅 涼・西條 茂
欠畑 誠治・香取 幸夫・小泉 敦弘
神谷 晴夫*・稲葉 孝志*

Canine Ear Mite, *Otodectes Cynotis*, Found on Both Tympanic Membranes of an Adult Woman

Mitsuko Suetake, Ryo Yuasa, Shigeru Saijo, Seiji Kakehata,
Yukio Katori and Atsuhiro Koizumi

(Tohoku Rosai Hospital)

Haruo Kamiya and Takashi Inaba

(Hirotsuki University)

A female patient had been suffering from intermittent tinnitus for several days. An otomicroscopic examination revealed a small mite moving on the tympanic membrane. The tinnitus increased when the mite was moving around the pars tensa and disappeared when the mite was moving on the surface of the external ear canal. After removal of the mite, the tinnitus disappeared.

The mite was identified as *Otodectes cynotis*, which causes ear mange in dogs and cats. The patient had kept a dog and a cat inside her house for one year as pets. Examination of their ears revealed many *Otodectes cynotis* in the external ear canals. It was assumed that the patient was infected with *Otodectes cynotis* from those animals. As far as we know, this is the first case to be reported of a mite on the tympanic membrane. It is important to be concerned about parasite infestation from pet animals.

Key words: mite infestation, *Otodectes cynotis*, tinnitus, external ear canal

はじめに

近年のペットブームにより、動物寄生性各種寄生虫のヒトへの被害の増加が報告されている¹⁾が、耳鼻咽喉科領域の報告は少ない。私共は、今回ペットの外耳道に寄生するダニによる

両側外耳道寄生症例を経験した。患者はペットのダニ寄生に気付かず室内にて飼育しており、ペットから偶発的に侵入したもので、昨今のペットブームを考えると公衆衛生上の啓蒙が必要と思われた。また、患者は断続的な耳鳴を主訴

として来院しており耳鳴の鑑別診断上も興味ある症例と考えたので文献考察を加えて報告する。

症 例

49歳女性, 1989年9月25日初診. 5日前より左耳にプツプツという断続的な耳鳴が出現, 難聴やめまいなどの症状はない. 初診時両側聴力は正常, ティンパノグラムはA型であった. 拡大耳鏡下に観察すると正常鼓膜上に小さなものが移動している様に思われたので, 顕微鏡下で詳細に観察すると, 移動する小物体はダニであることが判明した.

耳鳴はダニが鼓膜緊張部を移動しているときに最も大きく, ダニが外耳道, 鼓膜弛緩部やツチ骨短突起上を移動している時, あるいは静止している時には耳鳴は消失した. ダニの移動に伴う耳痛やかゆみはなく, 外耳道, 鼓膜に発赤など炎症を思わせる所見も認められなかった. 外耳道を洗浄しダニを除去したところ, 耳鳴は消失した.

10月17日, 2日前から前回同様の耳鳴が右耳に出現したため受診した. 右鼓膜上にダニが動

いているのが観察された(図1). 軟膏を塗布した綿棒を用いてダニを摘出した.

摘出したダニは, 弘前大学医学部寄生虫学教室にて同定したところ, イヌミミヒゼンダニ (*Otodectes cynotis*) の雌成虫であることが判明した. このダニは犬猫の外耳道に寄生し, 外耳炎を起こすことが知られている. そこで患者にペットの飼育について詳しく聞いてみると, 1年前より室内にてミニコリー犬と猫を飼育しており, 特に猫は毎晩自分の布団に入れて寝ているということであった. また患者は最近ミニコリー犬と猫が耳を頻繁に搔くことに気が付いていたが, 病気とは思わず放置していることがわかった. このためミニコリー犬, 猫の外耳道を精査したところ, いずれにも多数のダニの寄生を認めた. 犬, 猫から採取したダニは患者のものと同じイヌミミヒゼンダニ (*Otodectes cynotis*) と同定された. 以上から, ペット飼育に起因する外耳道ダニ寄生であると断定し, ペットのダニ駆除を行い, 患者へは同じ布団で寝るなどの密接な接触を避けるよう注意した. 現

図1 右鼓膜上のイヌミミヒゼンダニ(→印)

在まで6カ月経過しているが、再発生の兆候はない。

考 察

本症例は室内で飼育していたペットにダニが寄生していることに気付かず、密接な接触をしていたことによる外耳道ダニ寄生例である。著者らが調べた範囲ではペット飼育に起因したダニ寄生の報告はなく、また、耳鳴の鑑別疾患の上からも非常にめずらしい症例といえる。

イヌミミヒゼンダニ (*Otodectes cynotis*; 図2) は犬や猫及び肉食獣の外耳道皮膚表面に寄生し、上皮老廃物を摂取し外耳炎をひきおこすことが知られており²⁾、犬や猫などペットの間では決してめずらしいものではない。これまで本虫がヒトの外耳道に寄生したとする報告はないが、同虫寄生によって軀幹に皮疹を生じたとする症例がある³⁾。本症例では両耳に一匹ずつイヌミミヒゼンダニの成虫を認めたが、卵や幼虫は発見できず、明らかな外耳炎の所見も認められなかった。しかしイヌミミヒゼンダニが患者の外耳道に侵入、数日以上生存し、虫体の移動が耳鳴の原因になっていたことは間違いない。本症例の場合、これをダニ寄生とするか、ダニ

異物と考えるかはさまざまな意見があることであろう。寄生虫とは、他の動物(宿主)に生活の場と食物源を求める動物で、同時に生活環境調整の仕事を一部あるいは完全に宿主に委ねたものと定義することが出来る。イヌミミヒゼンダニは原則的に組織寄生ではないが、本症例では上記定義に該当すると考えられ、寄生と表現するほうが適切であろうと思われる。

近年のペットブームに伴って各種動物寄生虫によるヒトへの被害が増加傾向にあるといわれている。最近では、ネコショウセンコウヒゼンダニ (*Notoedres cati*)¹⁾、イヌヒゼンダニ (*Sarcoptes scabiei* var. *canis*)⁴⁾、イヌミミヒゼンダニ (*Otodectes cynotis*)³⁾ などによる皮膚炎の報告がある。いずれの場合も患者が、ペットのダニ寄生に気付かず接触していた場合に起こっており、飼い主の動物疾病への認識不足や日常管理の不徹底が原因と言われている。今回私共の経験した症例においても室内で飼育していた犬、猫に本虫感染を疑わせる耳症状が発現していたにもかかわらず、治療を行っていなかったことが原因であり、ペット飼育者への啓蒙が必要と思われる。

図2 イヌミミヒゼンダニ

- A. 雄成ダニの腹面(ネコの耳から検出) B. 雌成ダニの腹面(患者から検出)
a : 肉盤(吸盤) b : 触角 c : 肛門 d : 生殖器 e : 接合吸盤
f : 生殖口 1 ~ 4 : 第1 ~ 4脚

本症例の主訴はプツプツという断続的な耳鳴であった。耳鳴の大きさはダニが鼓膜上のどこに存在するかによって変化した。すなわち緊張部を移動中は音が大きくなり、弛緩部や外耳道を移動中あるいはダニが静止しているときには耳鳴は消失し、ダニの移動によって生じる音を耳鳴と感じたものと思われる。耳鳴とは本来音源が実在しないのに音感覚があるものを言う。本症例では、音源があるので、耳鳴として訴えられた外耳道内の異常音である。他覚的耳鳴としては他人に聴取されないであろうから適当でないだろう。また鼓膜緊張部、後上部は低周波の音刺激時に最も偏位が大きい部分であることが知られており⁵⁾、同部をダニが移動するとき音が大きくなったのもこのためであろう。

本症例における雌成ダニは図2に示すごとく、体長およそ400 μm 程度の微小なダニのためその動きに伴う耳痛はなかった。診断にあたっては、顕微鏡下での詳細な鼓膜の観察が有用であった。

また断続的な耳鳴を訴える患者にはダニなどの微小動物が存在している可能性も考え、詳細な鼓膜の観察が必要と考えた。

ま と め

ペット飼育に起因する外耳道ダニ寄生症例(49歳、女性)を報告した。患者は断続的な耳鳴を主訴として来院した。軟膏つき綿棒にて鼓膜上

のダニを顕微鏡下に摘出し、鑑定の結果イヌミミヒゼンダニの雌成虫と判明した。本種のヒトへの影響については十分知られていないが、ペットブームの昨今、このような症例の増加する可能性もあり、ペット飼育者への啓蒙の必要性が示唆された。また断続的な耳鳴を訴える患者には、ダニなどの微小動物が存在する可能性も考え、詳細な鼓膜の観察が必要と考えた。

文 献

- 1) 初鹿 了, 三好 薫: 猫疥癬虫に起因するヒト皮膚炎. 日本医事新報 **2877**: 29~32, 1979.
- 2) 小方宗次: 獣医臨床寄生学Ⅳ. 犬猫の寄生虫, 節足動物, 耳疥癬虫 (獣医臨床寄生虫学編集委員会編). 476~481頁, 文永堂, 東京, 1979.
- 3) 山口 昇, 藤本和義: イヌミミヒゼンダニによる皮疹. 衛生動物 **33**: 292, 1982.
- 4) 近藤力王至, 岡本 敬, 吉村裕之, 他: 犬穿孔疥癬虫による疥癬. 日本医事新報 **2872**: 27~29, 1982.
- 5) Khanna SM and Tonndorf J: Tympanic membrane vibrations in cats studied by time averaged holography. J Acoust Soc Am **51**: 1904~1920, 1972.

(原稿受付: 平成2年9月11日
原稿採択: 平成2年11月5日
別刷請求先: 末武光子
〒981 仙台市青葉区台原4-3-21
東北労災病院耳鼻咽喉科)